

平成 2 8 年 度

芸術文化学部 芸術文化学科

(デザイン情報コース・建築デザインコース・芸術文化キュレーションコース)

推薦入試・帰国生徒入試・社会人入試

小 論 文

注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かないこと。
- 2 問題は、全部で3ページ、解答用紙は1枚、下書用紙は1枚である。試験開始の合図があつてから確認すること。
なお、試験問題に文字などの印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れなどがあつた場合は、手を挙げて監督者に知らせること。
- 3 試験開始後に、解答用紙の指定欄に受験番号を算用数字で記入すること。
氏名を書いてはいけない。
- 4 解答は、すべて解答用紙に記入すること。
- 5 配付された問題冊子および下書用紙は、試験終了後、持ち帰ること。

実施年月日
27.11.25
富山大学

下書用紙

次の文章を読んで後の間に答えなさい。

今年の山女、岩魚釣りも、もうすぐ禁漁日を迎えようとしている。今頃の季節になると、いつもの年なら僕の眼のなかには今年行きそこねた谷や川の景色が、泳ぎまわる魚たちの躍動が浮かびあがってくる。そんなときはこうして東京に居ることが、途方もない時間の浪費に思えてくるはずなのである。

ところが今年の僕からは、釣りの時間が失われていくという焦燥がなくなっている。なぜだろうか、むしろいま僕は自分の気持ちの変化を観察することに時間を費している。

二月の解禁日が過ぎてから、今年も三、四十日は山里に滞在していたことだろう。しかし山吹が咲きはじめ新緑が山を覆いはじめても、川に降りていくことには少しだけ倦怠感があつた。川岸を歩いていくとき、いつでも僕は少しだけ疲れていた。

山女も岩魚も少なくなった。少なくなった魚たちを夢中になって追いかけることに、僕はさもしさを感じはじめていたのかもしれない。夜店の金魚すくいの水槽の前で、大人が二、三匹だけ残った金魚を本気で追い回しているような光景が、ときどき連想されていたことも確かだ。

たぶん僕は釣りのなかに夢をみつけれなくなってきていたのである。それは山里の空間が、もう釣り人に夢をみさせるだけの奥行きを深さを失っているからなのである。土砂に埋った川、広葉樹のない山、虫の飛ばない水面、コンクリートの護岸、堰堤えんてい（注）、そうして魚の減少、だがそれらだけが山里の世界の奥行きを深さを消失させていった原因であつたのだろうか。

僕が釣りに夢中になっていったのは、山里に僕たちのなくしてしまった夢の世界が残っていたからだ、いまは僕は自分を観察している。もちろん谷の美しさも山の深さもそのひとつだった。しかしそれ以上に、山里の人々の仕事感覚が僕をひきつ

けていたのではなかったか。

現代に暮らす僕たちは、はたして仕事をしながら生きているのだろうかときどき思うことがある。僕たちは生活のための稼ぎ人になってしまったのではなからうか。

仕事や労働と稼ぎは同じではない。仕事なら、それは生活の手段で終わるものではない。人間の手によって新しい価値を生み出し、歴史のなかに価値を蓄積していくための働き、それが人間の仕事なのではなかったか。

だが商品経済に振り回されている現代社会のもとでは、新しい価値の創造であり歴史への貢献であると実感できるような仕事の世界を、誰が手にしているだろうか。友人の熊沢誠によれば、現代の僕たちは生活のための孤独な稼ぎ人でしかないのである。

いまから一〇年少し前、手に入れたばかりの車に乗って山里を訪れるようになった頃、僕は山に住む人々の仕事と稼ぎの使いわけに、しばしば驚かされたものだった。本当はやりたくないけれど収入のための仕事、それを村人は稼ぎと呼んだ。土木工事の賃仕事に出ることが、一番安易な稼ぎの方法だった。子供は街に稼ぎに出ている、そういうときそれは街での就職を意味していた。もう街に定着していても、山に住む者からみれば給料のために働くことはあくまで稼ぎだったのである。なぜなら街での給料のための労働が新しい価値の創造であり、歴史に価値を蓄積していくものだと、どうしても村人には思えなかったからである。

今日は仕事に行ってくる、そう言つて家を出るとき村人はたいい山へと入つていった。自分の山の下枝や下草を刈るとき、沢の丸太橋を修理するとき、そうして収入にならない山の畑を耕すとき、村人はそこに自分の仕事の世界をみていた。沢の丸太橋を直し、山のなかに人の道をつけ、その道を歩きながら確かな山の生命力を見定めていくことのなかに、人々は山に暮らす者の仕事の意味を感じとつていたのである。

山は単なる自然ではない。はるかなる長さをもった人間の労働の歴史が、山のなかには蓄積されている。自分が他界した後も、自分の育てた木は新しい価値を生みつつけるだろう。山のなかに価値を蓄積していく歴史、そこに自分が参加していく楽しさ、山里の仕事の世界がそこにあった。

僕が釣りをしながらみていたものは、街では失われてしまったこの山里の仕事感覚だった。そうして山に住む者のこの仕事感覚が残っているかぎり、山里の自然も守られるだろうと僕は信じていた。

僕が釣りに倦怠感を覚えるようになったのは、こんな仕事感覚が山里からもなくなってきたからなのであるか。最近村人はかつてのような仕事の世界を捨てはじめた。稼ぎのためにしか体を動かさなくなった暮らし、いま山里もまたビルがみえなただけの街になってしまったのであろうか。

(内山節『自然と労働』から)

注 堰堤・・・河川や溪谷を横断して水流や土砂をせきとめるために築いた堤防。ダム。(『広辞苑 第六版』)

(本文は原文のままである。ただし、注を付した。)

問 筆者が述べている「仕事」と「稼ぎ」の違いを簡潔に要約した上で、あなたが将来就きたい職種において、どのような内容が「仕事」で、どのような内容が「稼ぎ」となり得るのかを八〇〇字程度で述べなさい。